

第 56 回 弘明寺サロン開催記

「写真で巡る壱岐・対馬への旅」

とき : 平成 29 年 9 月 9 日 (土) 14 : 00~16:30
ところ : 第 3 講義室
講師 : 永井藤樹氏
参加者 : 43 名

講師の永井藤樹氏は放送大学の名誉学生であり現在に至っても向上心は衰えることなく昨年 6 月に 5 泊 6 日の壱岐・対馬へ旅行をされ、100 枚を超す写真をもとに標題の講演をされた。

一日目 福岡

黒田官兵衛の息子、黒田長政の築いた福岡城を皮切りに



(壱岐)



(鴻臚館)

大濠公園内の「鴻臚館」の説明。この「鴻臚館」は昭和 62 年 平和台野球場の改修の際遺構が発掘されて世に出、交易品などの展示がされている。平安時代の迎賓館として遣唐使や新羅からの使節団などを迎え入れる外交のための館だったとか。

大濠公園内の「観月橋」、「松月橋」、「茶村橋」、「さつき橋」なども説明。

二日目 佐賀県唐津

静岡の三保の松原、福井の気比の松原とともに日本三大松原の「虹の松原」の写真説明。

「旧唐津銀行」の写真と、設計者「辰野金吾」、同じく丸の内の都市計画、建築計画に携わり、赤レンガの建物を設計し《一丁ロンドン》と言われる世界に通用する一大ビジネス街作りに貢献した「曾根達蔵」。

共に胸像として称えられている唐津出身のお二人のエピソードを交えての説明。

この写真のあたりは丁寧な説明がなされた。それは曾根達蔵の息子が曾根益であるということを講演者永井さんが初めて知ったから。

というのは昭和 42 年の衆議院選挙で永井さんが当時勤めていた会社の労働組合に曾根益が挨拶に来たこともありその折に永井さんも顔を合わせていてリアルタイムで街頭演説も何度か聞いていた、その曾根益がこの地で自分が写真に撮った曾根達蔵の息子であることがわかったことから思入れ深く説明されたのである。

奇しくも永井さんの平成 18 年度の卒業研究テーマが「神奈川県の上五十五年体制の成立

と崩壊」であったので改めて当時の資料を読み返すとちゃんと曾根益のことも書いていたと話された。

「名護屋城博物館」・・・秀吉が朝鮮、中国侵略のために築いた城。現在は日本列島と朝鮮半島との交流の歴史を調査、研究し展示することで今後の友好、交流の推進拠点を目指しているという。

「済州島（チェジュ）の石人像トルハルバン」
名護屋城博物館の入り口に置かれている。
トルハルバンとは（石のお爺さん）を意味するとか。
守護神と呪術的な宗教機能を備えた神様と説明された。



(石人像トルハルバン)

「唐津城」などの写真の後唐津港からフェリーで壱岐へ。



(対馬)

三日目 壱岐

壱岐・対馬は古来より朝鮮半島と九州を結ぶ海上交通の中継点として重要な位置にあり、中国の史書「魏志倭人伝」には邪馬台国の支配のもと（一支国）が存在していたと記している。

その（一支国）が発掘調査の結果「原の辻」が一支国の王都であると特定されたとのこと。

2000年前の壮大な夢の邪馬台国王都が 玄界灘に浮かぶ小島に確認されたのである。

「唐人神遺跡入口の鳥居」・・・この写真の説明の折永井さんは何となく聖域と言う感じを抱かせる・・・と話された。

「唐人神遺跡」・・・

昔から壱岐では中国人や朝鮮人のことを唐人と呼んでいたらしくこの唐人を神として祀ったことに由来しているらしいが この写真をよく見ると永井さんが聖域を感じたと言ったように無数のオーブが見られる。

あまり手入れのされていない遺跡のようでオーブにとって居心地がよいのであろうか。

この神様は今は性病、夫婦和合、安産、良縁を叶えてくれる神様として祀られているらしい。



「芭蕉と曾良の肖像画」、「曾良の墓」、「曾良の句の説明板」、「石に刻まれた曾良の句碑」と説明が続く。曾良は芭蕉の奥の細道の随行者として名を馳せているが壱岐へは幕府の命を受け巡見師団として九州北部から博多、壱岐へと巡見して渡って来た。

そして壱岐の勝本で病気になり亡くなっている。最後を看取った海産物問屋の中藤家で手厚く葬られて中藤家の墓地に祀られている。

「鬼の岩窟」、「双六古墳」、「黒崎砲台の砲弾」、「猿石」、「小島神社」・・・対馬へ渡る前に まだまだ興味深い写真が続く。

四日目 対馬

対馬は邪馬台国に属しているものの その邪馬台国がどこにあるのかは よくわからないのが周知の事実であるが 古来より中国、朝鮮から九州への中継地として重要な役割を担ってきた。それゆえ幕府からは日朝貿易の独占も対馬藩に認められていた。

明治政府においても国防上砲台、要塞が築かれている。

「宗武志（たけゆき）」・・・宗家は元対馬藩主で伯爵家として日韓併合推進のために李王朝最後の王女徳恵姫との婚姻を政府主導で執り行っている。

「百雁木と呼ばれる石段」、「宗義智の墓」、「宗武志氏の墓」、「雨森芳洲の墓」と写真は続く。



(写真 雨森芳洲の墓)

雨森芳洲は朝鮮との外交、貿易問題に心血を注いだ人、朝鮮と日本では人情、事勢、など異なることをよく理解し、互いに欺かず、争わないことが肝要であると説いた。

平成2年韓国よりノテウ大統領が宮中晩餐会で雨森芳洲の哲学である[誠信の交わり]を称賛した。

対馬の人たちは雨森のことをよく知らなかったのもう一度対馬の埋もれた偉人などを見直そう、という気運が高まるきっかけとなったらしい。

五日目 「和多都美神社」・・・豊玉姫と山幸彦を祀る海宮（うみみや）



「海中に立っている鳥居」

この鳥居をくぐって豊玉姫が山幸彦に会いにくると言い伝えられている。

「豊玉姫の墓」、「ヒトツバタゴの群生林」、「韓国展望所」、「平和友好の碑」、など丁寧に説明を受ける。

六日目 最後の日

「元寇の役で戦場となった佐須浦」、「小茂田浜の景色」、「石屋根倉庫」、「対馬藩校日新館の門」の

説明をうける。

100枚をはるかに上回る枚数の写真を日にちを追ってまとめ上げ、それぞれに解釈を付けて講義資料を作成された努力に頭が下がる思いで拝聴、拝見した。2時間半近く、途中10分の休憩をはさんだとはいえ、よどみなく話された体力、気力にも敬意を払うとともに、居ながらにして壱岐、対馬へと案内していただき、ありがとうございました。

いい旅行でした。永井さんお疲れ様でした。

(万場由美子・記)